

『大般若波羅蜜多經』における六波羅蜜多の構成

白 石 凌 海

本稿は、『大般若波羅蜜多經』に関して菩薩の修業徳目である六波羅蜜多の構造を考察し、その思想的基盤と実践の意義を探ろうとするものである。

般若經典群の集大成である玄奘訳『大般若波羅蜜多經』は全体が四処十六会からなるが諸經典は内容上概略以下の四種に分類される。①小品系、②大品系、③単独小部經典群、④第十一会と第十六会である。

六波羅蜜多説に関しては既に詳細なる研究が為されている。それらは主に①②に拘るものである。即ち①に就いては、經典成立史に関して最初期形成部分から時代が下がるに従って六波羅蜜多の記述が般若に関連して如何に展開細説されているかの追求であり、②は①を継承しつつ更に多様化した諸思想を註釈書『大智度論』等の所説内容から検討したものである。また③では六波羅蜜多の言葉はあつても、その内容については説かれぬ。

ところが『大般若波羅蜜多經』中最後期成立と推定される

④は整然として第十一会以下順次に布施を始めとする六波羅蜜多が説かれる。従つてここに六波羅蜜多各々の詳細なる所説が知られる。本報告では、④に関する思想的背景と各六波羅蜜多の相互関係の解明を当面の中心課題としたい。

漢訳では第十一会から第十六会まで一連の六波羅蜜多の説示に当てられているがチベット語訳では第十一会から第十五会までは『聖五波羅蜜多説大乗經』（梵文音写タイトルは、*Ārya Pañcaparamitānīdeśa nāma mahāyāna sūtra* 北京版七十八函 No. 848）であり般若分の第十六会は梵文が現存し『善勇猛般若經』（*Suvikrāntavikrami paripiccha prajāparamitā sūtra*）である。

即ち六波羅蜜多は本来「般若波羅蜜多」に「その他の五波羅蜜多」の構造である。六波羅蜜多のうち般若をそれ以外の波羅蜜多に対応させ導首（*gūryan sama*）とする。即ち般若が五波羅蜜多を導くとするのは小品系以来の基本的姿勢である。

両經典は独自に単独經典として存在する如くに形式上内容

『大般若波羅蜜多經』における六波羅蜜多の構成（白石）

上密接な関係は見られず相互に別成立とおもわれるが第十六會は、般若經典としては正統的なもので、龍樹造『中論』の清弁による註釈書『般若灯論』あるいは月称造『入中論』等に経証としての引用文が見え、特に中觀派との関係が深い。しかし六波羅蜜多に関してはそれぞれの記述があるものの内容説明は一切無い。即ちそこでは般若波羅蜜多の説示が目的で諸波羅蜜多に関する拘りは等閑視されているのである。

そこで以下では『聖五波羅蜜多説大乘經』について先ず各波羅蜜多の相互関係について、次いでかかる思想的根拠、即ちそこでは空思想に裏付けられた無執着の実践が基本とされるが特に二乗批判、在家重視の立場等の説示に注目し考察を進めたい。

各品を通じて六波羅蜜多それぞれの記述があるが多くの場合般若経特有の繰り返し表現の中に現われるもので教理的的重要性は何えない。特定の波羅蜜多がそれ以外の諸波羅蜜多に關係するのは布施、戒、静慮について見られるがとりわけ後二者の場合が重要である。

(1) 布施が一切波羅蜜多を増長する。

「是諸菩薩若時若時捨諸善根。施有情類。比諸菩薩爾時撰受布施波羅蜜多。是諸菩薩若時撰受布施波羅蜜多。比諸菩薩爾時爾時増長一切波羅蜜多……」〔正藏七卷 994. b, 北京版 7. b, 4〕（その他 992. c 参照、また布施と精進の關係記述が 996. b）

(2) 戒（具戒の菩薩）

「若諸菩薩隨所行施。無不皆用大悲。為首。常能發起隨順廻向一切智智相應之心。応知是名具戒菩薩。」〔1024. 6〕施が戒、忍、精進、静慮、妙慧となり類似形句の繰り返し。北京版 3. b. 1. 無不皆用大悲為首の言葉はないが漢訳と同意（精進との関連が 1036. c）

(3) 静慮と般若の關係

「若諸菩薩摩訶薩衆安住靜慮波羅蜜多。於諸靜慮及靜慮支。発起無著無想等……廻向趣求一切智智……撰受般若波羅蜜多。」

* 静慮と精進の關係 「若諸菩薩摩訶薩衆安住靜慮波羅蜜多。超過欲界諸雜染法。方便趣入四種靜慮四無色定寂靜安樂。還復棄捨受欲界身。精進修習行布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多及余無辺菩提分法……撰受精進波羅蜜多。」

* 静慮と忍の關係 「若諸菩薩摩訶薩衆修學成就大慈大悲。於諸有情欲作饑益。安住靜慮波羅蜜多。遇諸違縁。心無雜穢……撰受安忍波羅蜜多。」

* 静慮と戒の關係 「若諸菩薩摩訶薩衆安住靜慮波羅蜜多。於諸聲聞及獨覺地不生取著……撰受戒波羅蜜多。」

* 静慮と布施の關係 「若諸菩薩摩訶薩衆安住靜慮波羅蜜多。於諸有情起大悲念。暫不棄捨一切有情。欲令解脱生死苦。故。求証無上正等菩提。作是念言。我当決定以大法施撰受有情。常為有情宣說永斷一切煩惱眞淨法要……撰受布施波羅蜜多。」

施波羅蜜多。」(以上1060.b~1061.a 北京版77.b.2~)

※諸波羅蜜多が靜慮に關係「謂諸菩薩摩訶薩衆若住^三布施波羅蜜多^一(淨戒、安忍、精進、般若、諸余菩提分法)。當^二知爾時心亦在^三定。」(1061.c~1062.a 北京版80.b.3)

(4) 二乘批判(布施、戒、靜慮に關して多く説かれ特に戒、靜慮では「不求實際、不証實際、不現入滅受想定、不許……於三界法究竟出離」……等説かれる。)

(5) 在家重視の立場(1004.a, 1019.c等参照。余紙がないので(4)の詳細は省略する。)

以上の検討によって差当り次ぎの如くに結論づけられるであらう。

(I) 『善勇猛般若經』と『聖五波羅蜜多説大乘經』の思想的背景は共通している(無執著の実踐、在家重視等)が各々が独立したもので対告衆、会処等經典の形式に關して兩者の一体的關係は見られない。すなわち後者の成立は必ずしも前者を前提としていない。

(II) 諸波羅蜜多の關係は説かれるが六度相攝(大品系所説)の記述はない。六波羅蜜多のうち布施が重視され、とりわけ戒と靜慮がそれ以外の波羅蜜多に關係することが説かれる。

前者は、在家菩薩が煩惱を未だ断じることがなくても財施等を以て諸有情に施すのは声聞獨覺の無漏心より勝ることの主張であり、後者は声聞獨覺の三学のうち戒と定に向けられたものである。そこでは持戒か犯戒かの差別は、戒の内容或

『大般若波羅蜜多經』における六波羅蜜多の構成(白 石)

いは出家在家の別には拘りなく、慈心による有情利益の如何による。つまり、六波羅蜜多に關して端的に利他を求めるのが持戒とされる。同様に、靜慮に安住して有情利益すれば諸波羅蜜多を撰受するのである。従って菩薩に於ては、二乗の涅槃阿羅漢を求める修業目的、すなわち實際を証し三界の法に於いて出離を究竟とすることが否定される。

(III) 菩薩の修業徳目である六波羅蜜多是般若(大悲般若力)に依止しているのであるが六波羅蜜多の構成について般若以外の諸波羅蜜多の内的關連の必然的結びつきは見出し難い。そこで問題となるのは、利他行つまり二乗の自利に對して有情利益を説く立場であって必ずしも六波羅蜜多それぞれが菩薩の実踐に即して有効的に機能していない。

(IV) 六波羅蜜多是出家の三学を含む出家在家の総合としての菩薩の修業徳目であると従来より理解されている。然し『大般若波羅蜜多經』中最後期の成立に属すると推定される第十一会(第十六会の六波羅蜜多説の構成を見る限り、それは出家の三学を内に含むものではなくむしろ六波羅蜜多実践の精神は、これらを全面的に退けるものである。換言すれば二乗の自利に對する利他、有情利益の闡明である。(紙数の制限上注記は省略する。)

△キーワード▽ 『大般若波羅蜜多經』、六波羅蜜多

(大正大学副手)